

『ウィンザーの陽気な女房たち』における
“buck” の暗示する浄化の過程でのダメージと
“buck” の多義性が果たす役割
— 洗濯籠 (buck-basket) の場面を中心に —

**The Polysemy of “buck” and the Dramatic Unity
in *The Merry Wives of Windsor*:**

The Significance of the “buck-basket” and the Damage Caused
in the Process of Cleaning

武 岡 由樹子

TAKEOKA Yukiko

抄録：

3幕3場でフォルスタッフの脱出に用いられた洗濯籠を表す“buck-basket”の“buck”は異なる三つの意味を有し、それぞれが劇中で増幅されていく。特に「漂白する」という意味については、洗濯における当時の「漂白」の工程が洗濯物を傷めることにもなるという点に着目すれば、フォード氏の汚された名誉を回復（きれいに）するプロセス、彼が悩まされている嫉妬からの解放を試みるプロセスでダメージを負うことと重なることが興味深い。社会心理学における嫉妬からの解放・恥の経験からの解放のために人間がとる行動についての研究を援用しながら、それがフォード氏一人ではかえってダメージを負ってしまい果たせずに終わるが、フォード夫人とペイジ夫人の知恵と行動力によって解決に至る点を辿っていく。多義的な意味をもつ“buck”が劇のまとまりに貢献していくこと、そして洗濯籠に大きな役割が与えられることが最終的に“female governance”への礼賛も意味することを考察する。

キーワード：シェイクスピア、嫉妬、恥、洗濯

1. はじめに

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の中期喜劇『ウィンザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*, 1597?¹⁾) において、フォード夫人とペイジ夫人が二人に同内容のラブレターを書いて送ったフォルスタッフを懲らしめて仕返しをするのに、「洗濯籠」が用いられる。逢引の約束だと思ってフォルスタッフはフォード邸にやってくるが、留守であるはずのフォード氏が帰宅するとの知らせに、大いに慌てる。フォード夫人の指示でフォルスタッフは洗濯籠の中に隠れ、無事に脱出することができたのだが、その後、汚れた洗濯物とともにテムズ川に投げ入れられ、ひどい目に

遭ってしまう (3幕3場)。

ここで登場する「洗濯物を入れておく籠 (“buck-basket”)」の “buck” は、OED によれば、ここでの意味「洗濯する前の汚れ物」以外にも当時は、「(雄の) 鹿」、「交尾する」、「洗濯や漂白の最初の工程としてアルカリ液、灰汁のなかに洗濯物を浸す、あるいは煮沸する」などの意味で用いられていた (OED)。これらは全く異なる三つの意味のようではあるが、いずれも劇中で扱われている様々な事柄と関連している。

まず、“buck” の一つ目に挙げた意味である「(雄の) 鹿」は、そのまま角が生えたとされる「寝取られ亭主」のイメージと重なる。劇の中では、フォルスタッフに妻を寝取られたとされるフォード氏が「寝取られ亭主」や「額に角が生える」と描写される場面が多いのだが、最終場面においては、フォルスタッフがギザギザの大きな角をつけて柏の木の下で制裁を受けることになり、フォルスタッフとも結び付けられる。² 実は、「鹿」のイメージは劇冒頭からシャロー判事が彼の鹿をフォルスタッフが不法に殺したことを怒っている場面、その後、鹿肉をシャロー判事がペイジ氏に与えている場面、ペイジ氏の家で鹿肉パイがふるまわれている場面、と繰り返し登場し (岩崎 (1) 16)、最後のフォルスタッフが罰される場面にいたるまで劇全体を貫くものとなっている。

そして二つ目に挙げた「交尾する」という意味については、フォルスタッフが企むフォード夫人との逢引や浮気に連想が及ぶが、洗濯物や洗濯女の持つ性的なイメージをも想起させる。A. ハークによれば、洗濯物というのは、私的で秘められたものであり、性欲をかき立てるものとなりうる (Herk 897)。また H. オストヴィッチは、洗濯女が洗濯以外の身の周りの世話も行い、性的な行為もその仕事内容に含まれていたことを挙げ、ミセス・クイックリーが彼女の仕事内容が洗濯以外の仕事にまで及ぶと述べたことを当時の洗濯女と重ねる見方もあると指摘している (Ostovich 100)。ミセス・クイックリー自身が性的な行為を行っていないくとも、彼女が女性たちとフォルスタッフの間の取り持ち役を果たしていたことを考えれば、性的な交わりと洗濯女との関係性はこの劇においても存在していると考えられる。さらに洗濯籠に入れられたフォルスタッフが洗濯物と同等に扱われることは、一方で、フォルスタッフがフォード夫人とペイジ夫人という二人の女性を性の対象としての「洗濯女」として扱ったことと対応関係にあるとの指摘もある (Ostovich 101)。³

“buck” の三つ目として挙げたのは「衣類を洗濯すること、特に、漂白する」という意味である。⁴ 当時の洗濯事情からその工程では、漂白剤の入った液に浸すこと以外にも、熱湯の中に入れて煮沸したり、木製の棒でたたいたり岩にたたきつけたりして汚れを落としたり、水で洗ったり、すすいだりしていたことが分かっているが (Rawcliff 152-153; Malcolmson 3-5⁵; Mansell 152-153; Davidson 138-150; Wolfthal 50-52)、これは岩崎宗治氏や N. コーダが述べるように、そのままフォルスタッフが受ける仕打ち、シャリヴァリと重なっていく。シャリヴァリとは、E. トムソンによれば、「共同体のある種の規範に違反した人びとに対し、儀式化した形態で行われる敵対行為」(トムソン 81; 岩崎 (1) 14) と定義されるものであるが、この民衆的制裁と同じ形でフォルスタッフは懲らしめられていく。すなわち、フォルスタッフは、汚れ物の中に入れられ、殴打され、水の中に放り込まれ、そして鹿の角を頭につけさせられるのである (岩崎 (1) 14-15; Patern 185-187)。また、フォルスタッフが天秤棒につるされて洗濯籠で運ばれていく姿は、シャリヴァリや

スキミングトンで行われる「棒乗り (cowlstaff riding)」や「厚板乗り (riding the stang)」といった、天秤棒や梁の上にのせて辱めを与える行為を想起させるものとなっている (岩崎 (1) 14-15; Korda 94)。

多義的な意味をもつ“buck”から連想されるものが反響しあうなか、この中の特に「漂白する」という意味に注目したい。汚れたものをきれいにする「洗濯」と、フォルスタッフに妻を寝取られたと思って、嫉妬心と名誉棄損に心乱れるフォード氏が行う名誉回復の行為は自然と重なるが、洗濯における「漂白」の工程が実は洗濯物を傷めることにもなるという点に着目し、フォード氏の汚された名誉をきれいにするプロセス、彼が悩まされている嫉妬からの解放を試みるプロセスでダメージを負うことにもなることに目を向けた。社会心理学における嫉妬や恥を経験した人間がとる行動についての研究を援用しながら、フォード氏の場合はそれらがうまくいかず、結果として自己破滅的、自傷的な行為につながっていくことを辿っていきたい。また、“buck”の持つ多義性が、劇が扱う主要なテーマと関連し、劇の作品としてのまとまりに貢献していることを示し、buck-basketに脱出手段以上の役割が付与された背景を考察していく。

2. きれいにするはずの洗濯が、かえって生地を傷める、汚す? — “buck”の三つ目の意味「漂白する」の応用

①洗濯における「漂白」の過程での生地へのダメージ

“buck”には、洗濯することに加えて、漂白することをも意味していることが、劇中でのこの語の使われ方から分かる。3幕3場で、フォード夫人が使用人のジョンとロバートに指示を出す際に、“... and, when I suddenly call you, come forth and, without any pause or staggering, take this basket on your shoulders. That done, trudge with it in all haste, and carry it among the whitsters in Datchet Mead, and there empty it in the muddy ditch close by the Thames side.” (3.3. 9-14、下線は著者による、以下同じ) (「で、私が呼んだらすぐ出てきて、ぐずぐずせずにこの籠を担ぐ。担いだら、大急ぎでダチェット・ミードの洗濯屋街まで運んでって、テムズ川沿いのどぶに籠の中身を放り込む。」)と述べている。Arden 版の注によれば、“whitsters”は、「洗濯屋」のことで、whitener (洗濯物を漂白する業者)と同じ意味である (3.3. 13 n.)。実際、少し後のページ夫人の述べるセリフでは、“Look, here is a basket: if he be of any reasonable stature, he may creep in here, and throw foul linen upon him, as if it were going to bucking; or — it is whiting time — send him by your two men to Datchet Mead.” (3.3. 119-122) (「あら、籠だ。その人がよほどの図体でなきゃ、この籠にもぐりこめる。上から汚れものを詰め込んで、洗濯に出すように見せかけて—ちょうど洗濯屋が仕事はじめた時間だし—お宅の召使い二人にダチェット・ミードまで運ばせなさい。」)と、buckingがwhitingと言い換えられている。

洗濯のうち bucking が示すのは、洗うこと、特に漂白の工程のことであるが、漂白剤には石灰が用いられていたようだ。ところが、石灰は効力が強く生地を傷めてしまう (と考えられていた)⁶ ことが、少し後の時代にはなるが、1633年に、石灰を洗濯に用いることへの禁止を求める請願 (petition) が出されていたことから分かる。この請願には “... that the bleachers of linen cloth and other cloth be inhibited from bleaching any cloth with lime under pain of punishment of the persons of these that shall bleach with lime and other

pecuniary sums to be extracted from same.” (*The Acts of the Parliaments of Scotland* V 49; Page 191) とあり、石灰を漂白に使うことを禁止すること、そして違反した者に対しては罰が与えられることを求めている。この請願が出された後の1639年には、漂白における石灰の使用を廃止する内容の法律が正式に発令されることになる。⁷ 生地売買においては重さで値段がつけられていたため、生地が傷んで軽くなってしまう石灰による漂白は生地の市場価値を下げることになり、織物業者を不利な取引から守る措置がとられたのである (Page 187-189, 192; Gittins 195n; Higgins 13)。この法の発令は『ウィンザーの陽気な女房たち』が執筆または上演された時代より後の時代となるが、1600年代には漂白に石灰が使われていたことが分かっており (Page 186-187; Wisniak 876)、当時から汚れたものを洗う洗濯の過程で、生地を損なうことが起きていたことが確認できる。漂白剤の入った水溶液は熱く熱して、その中に衣類を入れていたことも指摘されており (Helgersson 169; Higgins 4-5; Wisniak 876-877; North 214)、石灰の効果だけではなく、熱による煮沸によってより一層、生地は傷められていたと考えられる。

②当時の洗濯事情から、「水洗い」や「叩き洗い」などによる生地へのダメージ

漂白以外にも、洗濯が生地を傷めてしまう可能性はあった。中世の頃から、女性たちは近くの川や小川に洗濯物を運び、他の邸宅に使える女性の使用人たちとともに洗濯を行っていた (Mansell 32)。また、川以外でも、町や都市では、衣類を洗う洗濯場が設けられており、洗濯用の湯沸かし、桶や洗濯槽、たたき洗い用の石、洗濯板などの洗濯用品などの道具類をしまっておく倉庫のような場所もあったようだ (Rawcliffe 154、二宮)。⁸ 洗濯方法は、衣類を水に浸してから、手でもみ洗いをしたり、足で踏み洗いをしたり、あるいは、川や泉の縁の岩などに衣類を打ちつけたり、こすったりして汚れを浮かせる手法がとられていたが、木製の櫛状の棒 (washing bat, washing paddle, beetle) などの道具を用いてたたき洗いをすることもあった (Rawcliffe 152-153; Malcolmson 3-5; Davidson 138-150; Mansell 152-153)。こうした工程は、少なからず生地を傷めることにつながったと考えられる。

そもそも、洗濯物が、フォルスタッフとともにどぶの中に放り込まれてしまっているのに、きれいにされるはずのものが、全くもって逆の、より一層汚れてしまう結果となっているのだが、“buck” 自体のもつ「漂白」の行為からも、この劇の展開は暗示されている。石灰による漂白、岩に打ちつけたり、道具による叩き洗い、煮沸、など、きれいにするはずの洗濯において生地が傷められることは確認できた。

3. フォード氏の「嫉妬からの解放」における失敗と「汚された名誉の払拭」における失敗

汚れたものをきれいにする「洗濯」と、フォルスタッフに妻を寝取られたと思って心乱れたフォード氏が行う嫉妬心からの解放と名誉回復の行為は自然と重なるとすでに述べたが、後者のフォード氏の場合も、きれいにすることを目的としながら、それが果たされない、むしろ汚される結果となる結末を辿っていききたい。

①「嫉妬」からの解放における失敗

まず、妻が浮気をしていると聞いたとき、フォード氏は嫉妬の感情に襲われる。これはフォード氏自身の言葉からも、また他者によるセリフからも見て取れる。フォード氏は、

「俺は嫉妬深くて助かった、神よ、感謝します！」(“God be praised for my jealousy!” 2.2. 292-293) と述べるし、「俺の疑いには裏づけがある。」(“my jealousy is reasonable” 4.2. 140) の言葉からも嫉妬に取りつかれていることは明らかである。また近くでみていた牧師のエヴァンズも、「いやあ、実に途方もない気分の嫉妬ですな。」(“By Jeshu, this is very fantastical humours and jealousies.” 3.3. 156-157) と述べ、フォード氏を支配しているものが嫉妬であることを指摘している。⁹

自他ともに嫉妬に支配されていることを認めるフォード氏が嫉妬からの解放のために行う行動については、石川実氏が「嫉妬する人間が、その嫉妬の感情を軽減するためにとる行動」として挙げている二つのものに照らして検証していく。石川氏によれば、一つ目は「他者の保持する『価値』の否定」であり、二つ目は「『価値』を保持する他者の否定」である(石川 150)。前者は、他者に奪われてしまった「価値」であるフォード夫人を貶め、彼女の評価を下げることで実現され、後者は、その「価値」を奪った張本人であるフォルスタッフを貶めることで果たされる。前者に関しては、価値があるとあれだけ大切に思っていた対象に対して、他人の手にわたってしまったと分かった瞬間に今度はその価値を実像より卑小化する試みであり、かなり皮肉な行為にうつる。フォード氏はブルックという男に扮してフォルスタッフのもとに様子を探りにいったはずであったが、気づけば、「フォードの女房の操を恋の手管で攻め落としてください。」(“only give me so much of your time in exchange of it, as to lay an amiable siege to the honesty of this Ford’s wife.” 2.2. 222-224) とフォルスタッフに依頼してしまっていた。フォード氏が本当にフォルスタッフと自分の妻が関係を持つことを願っていたのか解釈は分かれるであろうが、¹⁰ 妻の身を危険にさらしたことに違いはない。もし妻がフォルスタッフと浮気をしてしまったならば、妻が汚されることになるばかりか、当時の不貞をはたらいた女性の受ける罰が、鞭打ちや、荷車に乗せられ晒されること(carting)、通りに立たせて人々の視線にさらさせること(Holderness 33)、またその結果として受ける厳しい世間的評価であったことを考えると、妻をかなり貶めることになる。嫉妬からの解放のために、好きであった女性を汚すことは、「きれいにする過程でかえって何かを損なう結果を招く」先ほどの洗濯における漂白の効果と同じ道筋を辿っていると言える。

自らの劣位性を解消するために行うこととして挙げられる二つ目、後者の「『価値』を保持する他者を否定する」行動については、石川氏はさらに二つの行動に分けている。「価値」を保持する他者の人柄評価に影響を与える方法と、「価値」の持ち主に対する(個人を超越した力の)報復により他者の優位性を相殺する方法である(石川 152)。前者の他者のパーソナリティー評価を低下させようとする事については、フォード氏がフォルスタッフを捕まえて、彼に恥をかかせ、彼をとっちめる、とフォルスタッフの立場を悪くするような行為に及ぼうとしていることから、実行にうつしていることが分かる。2幕1場で初めてピストルからフォルスタッフがフォード夫人に好意を抱いていると聞き、心配がつのったフォード氏は「フォルスタッフをとっ捕まえてやる。」(“I will seek out Falstaff.” 2.1. 126) と直接フォルスタッフに対峙し、真相を暴き、フォルスタッフの評価を下げることに躊躇がない。また、その後も「フォルスタッフにほえ面かかせ」(“I will ... be revenged on Falstaff” 2.2. 293-294) てやる、「フォルスタッフめ、逃がすもんか。」(“I shall find Falstaff.” 3.2. 42)、「こうなりゃ悪魔だって赤面させてくれる。」(“Now

shall the devil be shamed.” 4.2. 113-114) と 2 幕から 4 幕まで一貫してフォルスタッフを懲らしめる姿勢を続けている。家探しをして真相を暴き、現場を取り押さえることでフォルスタッフの評価を下げようとフォード氏が躍起になっていたが、彼が必死になればなるほどかえって自分の立場を悪くし、嫉妬からの解放を果たせないばかりか、自分にとって不利な結果を招くことになってしまう。実際、ページ氏には「まあまあ、フォードさん、落ち着いて。それじゃご自分を侮辱するようなものです。」(“Good Master Ford, be contented; you wrong yourself too much.” 3.3. 152-153)、そしてページ夫人からも「フォードさん、こんなことなさって、ご自分への侮辱ですよ。」(“You do yourself mighty wrong, Master Ford.” 3.3. 192-193) と言われてしまうのだ。

後者の、自分で何かをするのではなく、「天の意思」「社会的正義」など個人を超越した力の報復により他者の優位性を相殺することについては、フォード氏一人の力では全く果たすことができないのだが、これは後にやや変則的な形で果たされることになる。

ちなみに、石川氏の挙げた二つの行動については、先行研究があまり詳細に記されていなかったが、調べてみると、以下の裏付けを得ることができた。R.S. ラザルスの認知理論 (Lazarus & Folkman) を援用して、恋愛における嫉妬のモデルを築き、この分野の先駆けの研究を行った G.L. ホワイトは、その対処行動の一つとして「パートナーかライバルの貶価」を挙げている (White & Mullen 33; Ben-Ze'ev (1990) 490; 中里 27, 29; Lazarus)。また、どちらか一方の価値を貶めることを挙げている例としては、パートナーに向かう行動については J. リッチの研究があり (Rich 999-1007; Guerrero et al. 275-276)、ライバルを貶めることについては、サロヴィーとロダンの研究が挙げられる (Salovey and Rodin 780-792; Guerrero & Anderson 61-64)。¹¹ さらに、嫉妬に襲われた人間がこうした行動をおこすことへの説明としては、L. フェスティンガーの認知的不協和理論が有効であろうと思われる。認知的不協和理論とは、人間は自己の認知内部に何らかの矛盾が発生すると不快な状態に陥り、その矛盾を解消しようと試みる、ということを説明したものである (三井他 13; Festinger 260-266; フェスティンガー 245-250)。¹²

以上のように、フォード氏はフォルスタッフに対しても、妻に対しても、価値を下げることで嫉妬に襲われた心を解放しようとしているが、その過程でダメージをも受ける結果となっていたことが確認できた。

②「名誉棄損」、「恥」からの解放における失敗

フォード氏は、嫉妬に狂っている男と自らを評し、周囲の人間もそのように見なすが、それ以上に恥をかかされたことに怒り、嘆くのである。寝取られ亭主になりたくない、世間から寝取られ亭主と見られたくない、との思いがより一層強いように感じられる。フォード氏は最初にピストルからフォルスタッフのフォード夫人への思いを耳打ちされたときも、ピストルに「用心しな、ほっとくと鹿に変身させられたアクティオンよろしく／自分の猟犬に噛み殺されるぞ。／ああ、おぞましきその姿！」(“Prevent, or go thou like Sir Actaeon he, / With Ringwood at thy heels. / O, odious is the name!” 2.1. 106-108) と警告され、「角をはやした寝取られ亭主の姿」(“The horn” 2.1. 110) になると脅されると、「女房を疑うわけじゃないが、あの男と二人きりにするのはごめんだな。信用しすぎて痛い目にあうこともある。この額には何にもはやしたくないよ。そう気楽に構えちゃいけない。」

（“I do not misdoubt my wife, but I would be loath to turn them together. A man may be too confident. I would have nothing lie on my head: I cannot be thus satisfied.” 2.1. 168-171）と屈辱的な姿になりさがることは何としても避けたいと思うようになる。また、ブルックに扮してフォルスタッフのもとを訪ね、彼がフォード夫人と浮気する計画に意欲的である様子を見たときも、「な、女房に不倫されたら地獄だ。俺のベッドは汚され、金庫は荒らされ、評判はぼろぼろ。こんなひどい侮辱を受けたうえ、おまけにおぞましい肩書までつけられるはめになった。しかもこの侮辱を加えた張本人に。」（“See the hell of having a false woman: my bed shall be abused, my coffers ransacked, my reputation gnawn at; and I shall not only receive this villainous wrong, but stand under the adoption of abominable terms, and by him that does me this wrong.” 2.2. 276-280）と述べ、浮気されたこともさることながら、「寝取られ亭主」という恥ずかしい肩書までついてしまうことを避けようと必死になるのである。フォード氏にとって、妻の浮気は嫉妬を引き起こすものでもあるが、自尊心が傷つけられる「恥」の問題としても彼は強く認識しているので、¹³ 嫉妬からの解放とは別に、恥の経験からの解放において人間がとる行動についても検証してみたい。興味深いことに、フォード氏は、恥の経験からの解放のプロセスにおいても、嫉妬からの解放と同様、それが果たせずに自己破滅的、自傷的な行動をとることになっていく。

心理学者 M. ルイスは、「認識された恥 (overt shame)」を軽減する方法としては、「否定／忘却」「笑い」「告白」の三つがあるとしている。まず、「否定」とは、人が恥の経験を消し去りたいと思ったとき、起きた事実について否認し、それを忘れるために焦点化しないように努めることであり、「忘却」の行為は、思考から恥の経験を消し去ることであるが、いずれも、いったん認識された恥の経験から距離をおき、離れることを重要視している (Lewis 128-130 ; ルイス 151-154)。フォルスタッフがフォード夫人を好きであるようだと初めてピストルから聞かされたとき、妻は若くはないからとフォード氏は一旦その可能性を否定するのだが、放っておくと「角をはやした寝取られ亭主の姿」に変えられてしまうぞとピストルに言われると、フォード氏は「まずことの真偽を確かめよう。」（“I will find out this.” 2.1. 115）、「よし、もっと調べてみよう。」（“Well, I will look further into’t, ...” 2.1. 213-214）と述べ、まずは自分でそれが本当であるのか確かめようと決意する。フォード氏の場合、妻の浮気について考えただけでかなり動揺し、ひどく取り乱してしまうにもかかわらず、その可能性を否定し、記憶から消し去る、といったことはせず、距離を置くどころか、真相の確認をするべく、よりのめりこむ形で近づいていくのである。¹⁴

ルイスの挙げた二つ目の「笑い」も、自己と情動経験との間に距離をおく上で役立つものであり、認識された恥を軽減しうる、あるいは取り除きうるメカニズムの一つである。笑いによって他の情動に焦点が移行し、恥から焦点をそらすことが可能になる。また、笑いは失敗をおかした人に、自分のことを見ている他者の側に加わる機会を与える。さらに、誰かの恥ずかしい場面を見た傍観者も、同じように恥ずかしさをおぼえてしまう、という伝染効果があるのだが、恥の経験をした本人が笑うことで、この恥のサイクルを断つことを可能にする (Lewis 130-131; ルイス 154-156)。「笑い」も、恥の経験と距離を置くことに意味があるわけだが、先程確認したように、フォード氏のとる行動は、真相究明という恥の経験にさらに近づくものであった。そもそも、フォード氏は世間の笑い者になりたくないという一心から真相究明に乗り出すので、自己を笑う境地には達することができて

いない。

三つ目の「告白」も、笑いと同様、自分のことを見ている他者の側に自分が加わることを可能にする行為である。告白をする時、私たちは他者のところへ行き、自分を恥ずかしめた出来事について語るわけだが、告白という行為を通して、自己は主体ではなく、自己を対象として見る「告白の聞き手」になりうる、つまり、自分自身から解放され、他者の立場へと移行することができるのだ (Lewis 131-137 ; ルイス156-163)。家探しのあと、何も発見できなかったことが分かったと、フォード氏はいったんは皆に謝罪をし、奇行の説明を告白するかのように見えた。彼は「さっきのことはどうかご勘弁を。どうしてこんなことをしでかしたか、その訳はいずれお話しします。なあ、お前、どうかページの奥さんも、申し訳ない、心からあやまるよ。」 (“... I pray you pardon me; I will hereafter make known to you why I have done this. Come, wife, come, Mistress Page, I pray you pardon me, pray heartily pardon me.” 3.3. 209-212) と皆に詫びるのである。ところが、約束していた説明はなされないまま、明らかに事情を知らされていないページ氏たちの前で二回目の家探しを行い、再び醜態をさらしてしまう。告白は実行できないまま、汚名を返上するつもりでの行動が、かえって恥の上塗りとなり、フォード夫人にも、「恥ずかしくないの？」 (“Are you not ashamed?” 4.2. 130) と言われてしまう。

これまでルイスの理論にしたがって検証してきたが、恥からの解放のためには、恥の経験から距離をとることが有効であることは、ルイス以外にも、樋口匡貴氏、パトナムとウィルソン、バーレントとベン＝アリ、J. エリソン他、S. パティソンがそれぞれまとめた恥への対処行動に「回避」や「撤退」 (“Withdrawn coping” や “Withdrawal” や “Avoidance”) が含まれていることから分かる (樋口 54-57 ; Putnam and Wilson 633, 638; Behrendt and Ben-Ari 1124; Elison et al. “Investigating” 222-223; Pattison 158-162)。¹⁵ ただ、フォード氏はこうした行動がとれていないことが確認できた。

以上、前節の内容も含めてまとめると、フォード氏が一人で行えたこととしては、「嫉妬からの解放」をもとめて、一つ目の「他者の保持する『価値』[フォード夫人]の否定」、二つ目の「『価値』を保持する他者[フォルスタッフ]の否定」のうち「1. 他者の人柄評価に影響を与えること」を挙げることができるものの、二つ目の「『価値』を保持する他者[フォルスタッフ]の否定」のうち「2. 『価値』の持ち主に対する(個人を超越した力の)報復により他者の優位性を相殺すること」、そして「恥からの解放」をもとめてとられる三つの行動である「否定」、「笑い」、「告白」については、果たせずに終わっている。汚されたものをきれいにするフォード氏の「洗濯」の行為は、きれいにすることを目的としながら、それが果たされない、むしろ汚される結果となってしまうのだが、このことは果たして解決をみるのだろうか。

4. 解決を導く、陽気な女房の活躍—female governance への礼賛

最終的には、フォード夫人とページ夫人が真実を明かすことで、解決の方向へと向かっていく。フォード氏が一人では果たせなかった「告白」も、女性たちが真実を話したことでフォード氏も事の顛末を告白することができたようだ。フォルスタッフに仕返しをするために彼に森に行くように伝える役目を、フォード氏が「いや、私がもう一度ブルックと名乗って呼んでこよう。」 (“Nay, I’ll to him again in name of Brook” 4.4. 74) と言って買っ

て出るからだ。ブルックのことについては、舞台上でフォード氏が皆に告げる場面はないが、ここでのセリフから、フォード氏がブルックに扮装してフォルスタッフのところに行っていたいきさが皆に告げられ、それをふまえたうえで、再度フォード氏が「ブルック」としてフォルスタッフのもとへ訪れて彼を森へと誘い出す役目を請け負ったことが分かる。また、「告白」を果たせたばかりではなく、「否定」と「笑い」で必要とされていた「恥の経験と距離をおくこと」についても、女性たちが計画したフォルスタッフへの懲らしめに自らも参加することで客観的な立場に立つことが可能となり、恥の経験からの解放へと至れるようになる。5幕5場で、フォード氏が「さてと、こうなるとおめでた野郎は誰ですかね？ブルックさん、フォルスタッフは悪党ですよ、間抜けな悪党だ。ほら、そこにあるのがあいつの角です、ブルックさん。それにですね、ブルックさん、あいつはフォードのものを狙いましたが、頂戴したのは洗濯籠と梶棒と二十ポンドの金だけだ。その金だってブルックさんに返さなきゃならない。なんせあいつの馬を押さえてありますからね、ブルックさん。」(“Now, sir, who’s a cuckold now? Master Brook, Falstaff’s a knave, a cuckoldly knave. Here are his 110 horns, Master Brook. And, Master Brook, he hath enjoyed nothing of Ford’s but his buck-basket, his cudgel and twenty pounds of money, which must be paid to Master Brook. His horses are arrested for it, Master Brook.” 5.5. 109-115) と言って、自ら（が扮した「ブルック」）を「ブルックさん」と呼ぶとき、これはフォルスタッフが「ブルックさん」と言っていた口調を真似たものののだが、フォード氏は、寝取られ亭主の汚名を着せられた恥ずべき自分を（それを解決するために創り出した）「ブルック氏」というキャラクターとして客観視し、自己から切り離して、決別を果たしたとも理解できる。また、フォルスタッフへの制裁を観ることは、嫉妬の解放のプロセスで果たせなかった『『価値』の持ち主に対する（個人を超越した力の）報復』（石川 150）の実現ともなり、女性たちの知恵と行動力によって、フォード氏は嫉妬からも、恥の経験からも解放されるのである。¹⁶

寝取られ亭主であるフォード氏ではなく、フォルスタッフがシャリヴァリの制裁を受ける対象になったことが問題として残るが、これについては、本稿の最初で挙げた“buck”の多義性が効果的に働く。“buck”の一つ目の意味であった「鹿」は、「額に角が生える」とされる「寝取られ亭主」のフォードと関連づけられるが、ギリシャ神話の中で女神ダイアナの水浴を盗み見たために「鹿」に変身させられたアクティオンの挿話から、「鹿」のイメージは「過剰な欲望、色欲」を有したフォルスタッフとも関連づけられる（2.1. 106 n.; Steadman 231-233; Parten 194, 198; 岩崎 (2) 72）。（2幕1場でピストルが「用心しな、ほっとくと鹿に変身させられたアクティオンよろしく／自分の猟犬に噛み殺されるぞ。／ああ、おぞましきその姿！」(“Prevent, or go thou like Sir Actaeon he, / With Ringwood at thy heels. / O, odious is the name!” 2.1. 106-108) と述べたときは、フォード氏がアクティオンと結び付けられていることは興味深い。ギリシャ神話の挿話では、鹿に変身させられたアクティオンは、その後、自分の猟犬たちに追われて噛み殺されてしまうのであるが、ピストルは、自分がお金で依頼をした相手である（いわば自分の猟犬同然の）フォルスタッフに、フォード氏が（アクティオンのように）噛み殺されてしまうことを心配して忠告したわけである。劇の結末では、このアクティオンのイメージもフォード氏からフォルスタッフへと引き継がれ、すべてがフォルスタッフに引き渡されるための秀逸な伏線に

もなっていると考えられる。)そして、これは同時に“buck”の二つ目の「交尾する」という意味のもつ、性的な要素にもつながっていくものである。「鹿」を介することによって、寝取られた亭主を辱め懲らしめるはずの儀式は、過剰な欲望に支配されてしまったことを咎める儀式へと意味が転換されるのだ。実際、フォード氏のセリフの中で、“buck”の三つの意味が同時に登場する箇所がある。3幕3場で洗濯籠が運ばれていくのを目にすると(実はこの中にフォルスタッフが隠れていたのだが)、フォード氏は“Buck? I would I could wash myself of the buck! Buck, buck, buck! Ay, buck! I warrant you, buck — and of the season too, it shall appear.” (3.3. 144-146) (「汚れ物? 汚れを落としたいのはこっちだ! この面汚しが! 世話を焼くだと? ああ、俺は妬いてるよ、ああ、妬いてるとも、妬いてるとも! 妬かせるのは誰だ、さかりのついたお前じゃないか。」岩崎訳では、「洗濯^{バック}だって? わたしも鹿^{バック}を洗っておとしたいよ! バック、バック、バック! そうだ、バックだ。たしかにバックだ。ちょうど交尾の季節だ。」(岩崎 (2) 72)となっている。)と叫ぶ。“buck”の三つの異なる意味が代わる代わる現れ、フォード氏の脳内では連想が駆け巡り、このすり替えの下地が作られているようにも感じられる。フォルスタッフは、5幕5場の制裁を受ける場面で、鹿の角(“buck”の一つ目の意味「鹿」)をつけ、過剰な性への欲望(“buck”の二つ目の意味「交尾する」に準ずる性的な意味合い)のために、妖精役の子供たちに(洗濯のつまみ洗いのように)つねられる(“buck”の三つ目の意味「衣類を洗濯すること、特に、漂白する」を連想させる)のも、この“buck”の三つの意味が視覚的にも統合されているように思われる。

さらに、A. パーテンによれば、フォルスタッフへの制裁で情欲を罰することに転換したかのように見えたこのイベントも、それ以上に、守られた貞節を称えることに重きがおかれ、おめでたいものへとさらなる転換が行われ (Parten 190)、このフォルスタッフの騒動は終わりを迎えることになる。¹⁷

洗濯籠、buck-basket の登場は、フォルスタッフの脱出手段として用いられていただけでなく、“buck”の持つ三つの意味へと連想をもたらし、三つの意味はそれぞれ劇の内容と関連しながら、劇を有機的に結び付けることに貢献していた。そして、家庭用品を用いて家庭の主婦たちが知恵と行動力で自らの名誉を守り抜いたこと (Helgersson 37; Korda 86)、夫が一人では果たせなかった嫉妬からの解放や名誉回復の実現に妻が尽力したことは、女性が家庭を管理・統制し、問題を解決し平和に治めていくことにおいて卓越した力をもつことを示したことになり、これは間接的に当時の女性統治者への敬意と称賛にもなったに違いない。¹⁸

本稿は2023年10月14日、第61回シェイクスピア学会での口頭発表をもとに、加筆・修正を行ったものである。

注

- 1 創作年代は、The Arden Shakespeare 版の Introduction に拠る。以下、*The Merry Wives of Windsor* からの引用はすべてこの版により、幕、場、行を括弧内に示す。また、日本語訳は松岡訳を使用した。
- 2 妻を寝取られた夫(「寝取られ亭主」)は「額から角が生える」というイメージは、シェ

イクスピアではよく用いられるが、なぜ寝取られ亭主に角が生えるのかについては諸説ある。詳しくは、Graber and Richter, Bruster, McEachern, Silva 論文を参照のこと。

- 3 実際、1幕3場で、フォルスタッフは「どうだ、俺はフォードのかみさんに恋文を書いた。こっちはペイジの女房宛てだ。あの女もついさっき俺に色目を使い、意味ありげな目つきで体じゅうじろじろ見やがった。女の目の光がぱっと俺の足に射したと思うと、お次はこの堂々たる太鼓腹を照らす。」(“I have writ me here a letter to her; and here another to Page’s wife, who even now gave me good eyes too, examined my parts with most judicious oeillades. Sometimes the beam of her view gilded my foot, sometimes my portly belly.” 1.3. 55-59) や「いやあ、あの女ときたら、俺の体をむさぼるようにねめまわす。日光を集めるレンズってとこだ、熱っぽい目で黒焦げにされそうだったぜ。」(“O, she did so course o’er my exteriors, with such a greedy intention, that the appetite of her eye did seem to scorch me up like a burning glass.” 1.3. 62-64) と述べ、フォード夫人とペイジ夫人を（貞女ではない）性的に誘惑してくる娼婦的な存在とみなし、性の対象としての「洗濯女」と同等に扱っている。
- 4 アーデン版の注にも記されているように、“buck”はOEDによれば「漂白するために衣類を灰汁で洗うこと、または灰汁に浸すこと（“to soak clothes or wash them in lye for bleaching”）」(OED, Buck v.¹)”を意味し、後に「この作業を行う前の衣類（汚れた衣類）」(OED Buck sb.³ 3)を指す語として用いられるようになったようだ（3.3. 2 n.）。
- 5 資料のタイトルに18世紀以降の年代が含まれている場合でも、その前の時代について言及されている箇所があり、大変参考になったので間接引用の出典として記載しておく（Malcolmsonをはじめ、以下 Gittons による文献など）。
- 6 現代の科学では、必ずしもそうではないとの反論があることをF. ペイジは指摘している（Page 187）。また、漂白については、（洗いのプロセスだけではなく）洗濯の後に、生地を木につるしたり、草地に広げたりして、太陽光のもとに干すこと（L. ギッティンズの資料には“field bleaching”と表されていた）で（漂白を）行っていたこともここに付け加えておく（Gittins 194; Wolfthal 50-52; North 212, 222; Page 186）。D. ウルサルの資料には、その様子が描かれた絵画も掲載されている（Wolfthal 52）。
- 7 さらに、1661年と1693年にも同内容の法律が発令される。1693年の法律には“*And their Majesties [William and Mary] with advice and consent foresaid, strictly Prohibit and Discharge the Bleaching of any Linen Cloth whatsoever with lime, under the pain of Twenty pounds Scotts, by and attoure the confiscation of the cloth so bleached ...*” (*The Acts of the Parliaments of Scotland* IX 312; Page 192) とあり、いかなるリネン布をも石灰を用いて漂白してはならないことが記され、違反すれば罰金が科されていた。1661年の法律は、“*Act discharging the exportation of linen yarn and regulating the breadth of linen cloth etc.*”と題されたものであり、W.R. スコットがこの法律について“‘an act discharging the exportation of linen yarn,’ passed in the first Parliament of Charles II, yarn was to be sold by weight, bleaching by lime was forbidden, and all linens were to be of a certain size, according to their price.” (Scott III 162; Page 192) と書いているように、生地が販売される際には重さで値段が決められ取引されること、

(そのため) 販売される生地が石灰で漂白されることは禁じられ、生地は決まった規格(大きさ)であることなどが定められていた。これは、石灰を洗濯に用いることの禁止がリネン取引を強く意識してなされたということを裏付けるものと言える (Page 191-192)。

- 8 川や町で洗濯が行われていたことは、皮肉なことに、当時、洗濯場をめぐって起きていた問題に関連した文書が残されていることから分かる。16世紀にイングランド南東部のチェルムズフォードでは、町の大通り沿いの水路でリネン類や衣を洗うことを禁ずる正式な命令が出されており、このことから川には多くの人が洗濯をしに集まっていたことが分かる (Flather 349)。コヴェントリーでも、1461年以降は川で洗濯をすると罰金を科されていた。反対に、1417年には、ロンドンの市長や長老議員たちがテムズ川の棧橋や埠頭の所有者に対して、洗濯をしにきた貧しい一般市民に川を使わせないということが続けた場合、罰金や禁固の刑に処すと脅したことが記録として残っている。さらに1480年にはコヴェントリーの修道院長から、洗濯のために川が汚染され、魚に悪影響を与えているという訴えがなされている。川で洗濯を行うことについては、それを禁止する法がでたり、むしろ奨励するような動きがあったり、地域や時代で異なるようだが、いずれも川で洗濯が行われていたことを示す貴重な資料と言える (Rawcliffe 154)。

- 9 以下、嫉妬について述べるにあたり、ここで「嫉妬」の定義を引いておく。フォード氏自身の認識している「嫉妬」について説明している場面はないが、OEDによる jealousy の説明は、“3. Solicitude or anxiety for the preservation or well-being of something; vigilance in guarding a possession from loss or damage 4. The state of mind arising from the suspicion, apprehension, or knowledge of rivalry: 4 a. In love, etc.: Fear of being supplanted in the affection, or distrust of the fidelity, of a beloved person, esp. a wife, husband, or lover.” (OED) となっている (和田実氏は、この箇所の日本語訳を付けながら、丁寧な説明を行っている。和田 110-111)。また類義語である “envy” との違いについては、A. ベン＝ゼエブが述べている説明が有益であるので参考までに挙げておく。彼によれば、“envy” は他者が所有しているものを欲しいと願うことであるのに対して、“jealousy” は自分がすでに所有しているものを他人に取られるのではないかと失うことを恐れることであるようだ。また、前者が二者間で起こるものであるのに対し、後者は三者の間で起きるとも指摘している (Ben-Ze’ev (2010) 41)

- 10 K. マウスは、フォード氏が妻に復讐し、妻を苦しめる (“torture”) ことを楽しみにしていたと解釈している (Maus 572)。
- 11 リッチは、パートナーに向けられる行動として、パートナーにカードやプレゼントを贈ったり、どれだけ相手の存在が必要であることを伝えたり、頼まれたことを喜んで行ったりするというパートナーに好感を抱かせるような行動をとることを挙げる一方で、冷たくあしらったり、パートナーの気持ちを傷つけるようなことをしたり、別れると脅したりといった、パートナーが喜ばない行動をとるとも述べている (Rich 1002; Guerrero et al. 276)。浮気に際して、パートナーにとる行動について、グエレロとアンダーソンの研究では、嫉妬の気持ちを共有したり、説明を求めたりすることを挙げ

ながらも、その一方で、相手を責めたり、不満をぶつけたり、脅したり、皮肉を言ったり、ものを投げたり、といった攻撃的な態度に出ることについても指摘している (Guerrero et al. 275-276)。グエレロとアンダーソンは、嫉妬への反応行動を14パターンに分類しているが、その一つに「ライバルを貶める」ことをも挙げ、具体的には、ライバルを直接罵倒する、脅す、ライバルの評判を落とすようなことを他者に言う、暴力をふるうことなどとしている (Guerrero et al. 280-281)。また、ライバルである浮気相手に向けられる行動として、サロヴィーとロダンの研究では、ライバルとのコミュニケーションを避けるばかりか、ライバルの良くない点を他者に言いふらす、積極的に (ライバルの) 世間の評価を落とすように行動することが挙げられている (Salovey and Rodin; Guerrero & Anderson 61)。ホワイトとマレンの研究では、パートナーとライバルの双方に対して対処行動が現れることが指摘されている (White & Mullen 33)。

- 12 フェスティンガーは「喫煙が健康に悪い」ということを学んだ常習的喫煙者を例にとり、彼がどのように不協和を低減するか説明した。この喫煙者は、自分の行動をやめること、つまり、喫煙をやめる、ということで、自分の行動に関する認知と「喫煙が健康に悪い」という知識を協和させようとするか、あるいは、知識の方を変え、「喫煙が健康に悪くはない」とする情報の入手に努めることで認知的不協和を低減させようとするか、二通りの方法があるとした。どちらの場合も、行動の認知と知識のいずれかを「否定」することで齟齬をなくそうとする行為である (Festinger 55-56; フェスティンガー 6)。
- 13 嫉妬が自尊心を低くすることについてはすでにホワイトによる指摘として言及したが、他にも、グエレロとアンダーソンやマセス、ベン＝ゼエブによるものがある (Guerrero et al. 274; Mathes 1552, 1553, 1555; Ben-Ze'ev (1990) 491)。また、嫉妬時に生じる情動の性差についての研究では、女性に関係に重きをおくのに対し、男性は自分に焦点を合わせ、自尊心を維持することを大切にするという指摘があることも挙げておく (Guerrero et al. (2011) 310-315; 和田 215)。
- 14 グエレロとアンダーソンは、妻の浮気を疑った場合、その疑念を払拭するため、浮気相手に近づき、直接対峙して情報を得ようとする事 (“information seeking”) を挙げている (Guerrero & Anderson 53-54; Guerrero et al. 275)。フォルスタッフは、今回用いたルイスの嫉妬における三つの対処行動については「行わなかった」という結果であったが、彼のとった行動は、グエレロとアンダーソンの研究では十分説明のつく行動であり、奇異なものであったわけではないと言える。
- 15 具体的には、樋口氏が恥への11の対処行動の中に「逃走」、「無視」、「弁解」、「正当化」などの「拒絶」や「否認」によって恥を低減させようとする行動を挙げていること (樋口 56)、パトナムとウィルソンやベーレントとベン＝アリがそれぞれまとめた対処行動の三区分に「回避」 (“Withdrawn coping” や “Avoidance”) が入っていること (Putnam and Wilson 633, 638; Behrendt and Ben-Ari 1124)、エリソンらの研究では、D.L. ネイサンソンの「恥の羅針盤」 (Compass of Shame) モデルをもとに、四つの恥の対処行動のうちの二つを「回避」 (“Avoidance pole”) と「撤退」 (“Withdrawal pole”) にしていること (Elison et al. “Investigating” 222-223; Nathanson) が挙げられる。S. パティソ

ンも、先述のネイサンソンの分類について触れ「回避」や「撤退」の重要性に言及しながら、その後で、恥への対処行動として、「恥から逃れること」(“Escaping from Shame”)の一つとして「儀式」(“ritual”)を挙げている(Pattison 111-114, 158-162)。これは第4節の解決編の内容につながっていくものである。

- 16 シェイクスピアの他の作品に比べると、『ウィンザーの陽気な女房たち』は、嫉妬に狂う夫が治癒または更生をし、そして妻が死ぬことはない、唯一の作品であるという指摘がある(Olson 175)。またこの劇には、1623年に出版された第1・二つ折本(First Folio、以下、Fと記す)と1602年に出版された四つ折本(Quarto、以下、Qと記す)の二つの版があるが、Qの方が、フォード氏が治癒された(“cured”)ように描かれているという指摘がある(Olson 176)。長らくQは一貫性を欠く、俳優による記憶の再構築から作られた信頼に値しないものとされてきたが、Qが演劇的価値を有するものとして再評価されたことで、Qで描かれているフォード氏の行動や嫉妬についても、ある一定の評価を与えるべきであると考えられるようになった(Olson 177)。一方、Fの方は、フォード氏の嫉妬も激しく、フォルスタッフが辱められる必要があったように描かれているが、これは、後の演劇的因習(dramatic convention)に慣れている観客に合わせて修正されたと考えられている。Fの描かれ方を見ると、フォード氏の嫉妬は完全に治癒されうるものではなく、また再燃するものではないかという見方もあるが、そのようなFであっても、フォード氏のセリフ“Pardon me (wife) henceforth do what you wilt: / I rather will suspect the Sunne with gold, / Then thee with wantonness: Now doth thy honor stand / (In him that was of late an Heretike) / As firme as faith.”(2128-2132)(Folio版では場面の区切り(scenic division)が行われていないため行数のみの表記となるが、参考までに記しておく、アーデン版では4幕4場となっている場面にあたる。)をもって治癒されたとみなすことができるとR.オルソンは指摘している(Olson 181)。
- 17 フォルスタッフが最後に罰を受けることについては、それが詩的正義のため、二人の「女房たち」に裏切られて仕返しをされたため、過剰な欲望をいだいたため、などの様々な理由が挙げられている(St. Pierre 120; Steadman 231; Kahn 150)。また二人による(鹿の)角の受け渡しは、寝取られ亭主の普遍性を表しているという指摘がある(Kahn 149-150; St. Pierre 120)。
- 18 N.コーダは、この劇では、女性が管理・監督する「家庭」という領域を自ら管理・監督しようとする夫の行き過ぎた干渉は、むしろ嘲笑の対象として描かれていると指摘している(Korda 91, 93, 96)。J.デニスやN.ロウによる、エリザベス女王が直々にシェイクスピアにこの劇を二週間で書かせたという話、また内容としてフォルスタッフの恋愛を描いてほしいと依頼したという話が一つの伝説にすぎないとしても(Schoenbaum 144-145)、シェイクスピアがエリザベス女王を意識し、女性の管理・監督・統制における優れた能力を讃美したという可能性は否定できないであろう。

Works Cited

- Behrendt, Hadar and Rachel Ben-Ari. “The Positive Side of Negative Emotion: The Role of Guilt and Shame in Coping with Interpersonal Conflict.” *The Journal of Conflict Resolution* 56.6 (2012): 1116-1138.
- Ben-Ze’ev, Aaron. “Jealousy and Romantic Love.” *Handbook of Jealousy: Theory, Research, and Multidisciplinary Approaches*. Eds. Sybil L. Hart and Maria Legerstee. Chichester: Wiley-Blackwell, 2010. 40-54.
- . “Envy and Jealousy.” *Canadian Journal of Philosophy* 20.4 (1990): 487-516.
- Bruster, Douglas. “The Horn of Plenty: Cuckoldry and Capital in the Drama of the Age of Shakespeare.” *Studies in English Literature, 1500-1900* 30.2 (1990): 195-215.
- Davidson, Caroline. *A Woman’s Work is Never Done: A History of Housework in the British Isles 1650-1950*. 1982. London: Chatto & Windus, 1986.
- Elison, Jeff, et al. “Investigating the Compass of Shame: The Development of the Compass of Shame Scale.” *Social Behavior and Personality* 34.3 (2006): 221-238.
- . “Shame-focused Coping: An Empirical Study of the Compass of Shame.” *Social Behavior and Personality* 34.2 (2006): 161-168.
- Festinger, Leon. “Cognitive Dissonance.” *Scientific American* 207.4 (1962): 93-106.
- . *A Theory of Cognitive Dissonance*. Stanford: Stanford UP, 1957. (邦訳：レオン・フェスティンガー『認知的不協和の理論』末永俊郎監訳、東京、誠信書房、1965年。)
- Flather, Amanda J. “Space, Place, and Gender: The Sexual and Spatial Division of Labor in the Early Modern House.” *History and Theory* 52.3 (2013): 344-360.
- Freedman, Barbara. “Falstaff’s Punishment: Buffoonery as Defensive Posture in *The Merry Wives of Windsor*.” *Shakespeare Studies* 14 (1981): 163-174.
- Gittins, L. “Innovations in Textile Bleaching in Britain in the Eighteenth Century.” *The Business History Review* 53.2 (1979): 194-204.
- Graber, Robert Bates and Gregory C. Richter. “The Capon Theory of the Cuckold’s Horns: Confirmation or Conjecture?” *The Journal of American Folklore* 100.395 (1987): 58-63.
- Guerrero, Laura K, and Peter A. Andersen. “The Dark Side of Jealousy and Envy: Desire, Delusion, Desperation, and Destructive Communication.” *The Dark Side of Close Relationships*. Eds. Brian H. Spitzberg and William R. Cupach. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 1998. 33-70.
- Guerrero, Laura K., et al. *Close Encounters: Communication in Relationships*. Thousand Oaks CA: SAGE, 2011.
- . “Coping with the Green-Eyed Monster: Conceptualizing and Measuring Communicative Responses to Romantic Jealousy.” *Western Journal of Communication* 59 (1995): 270-304.
- Helgerson, Richard. “The Buck Basket, the Witch, and the Queen of Fairies: The Women’s World of Shakespeare’s Windsor.” *Renaissance Culture and the Everyday*. Eds. Patricia Fumerton and Simon Hunt. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1999. 162-

182.

- Herk, Aritha van. "Invisibled Laundry." *Signs* 27.3 (2002): 893-900.
- Higgins, S. H. *A History of Bleaching*. London: Longmans, Green, 1924.
- Holderness, Graham. "Cleaning House: the Courtly and the Popular in *The Merry Wives of Windsor*." *Critical Survey* 22.1 (2010): 26-40.
- Kahn, Copelia. "'The Savage Yoke': Cuckoldry and Marriage." *Man's Estate: Masculine Identity in Shakespeare*. Berkeley; U of California P, 1981.
- Korda, Natasha. *Shakespeare's Domestic Economies: Gender and Property in Early Modern England*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2002.
- Lazarus, R.S, and S. Folkman. *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer, 1984.
- Lewis, Michael. *Shame: The Exposed Self*. New York: Maxwell Macmillan International, 1992. (邦訳：マイケル・ルイス『恥の心理学』高橋恵子他訳、京都、ミネルヴァ書房、1997年。)
- Malcolmson, Patricia E. *English Laundresses: A Social History, 1850-1930*. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1986.
- Mansell, Charmian. "Beyond the Home: Space and Agency in the Experiences of Female Service in Early Modern England." *Gender & History* 33.1 (2021): 24-49.
- Mathes, Eugene W., et al. "Jealousy: Loss of Relationship Rewards, Loss of Self-Esteem, Depression, Anxiety, and Anger." *Journal of Personality and Social Psychology* 48.6 (1985): 1552-1561.
- Maus, Katharine Eisaman. "Horns of Dilemma: Jealousy, Gender, and Spectatorship in English Renaissance Drama." *ELH*, 54.3 (1987): 561-583.
- McEachern, Claire. "Why Do Cuckolds Have Horns?" *Huntington Library Quarterly* 71.4 (2008): 607-631.
- Nathanson, Donald. *Shame and Pride: Affect, Sex, and the Birth of the Self*. New York: Norton, 1992.
- North, Susan. *Sweet and Clean?: Bodies and Clothes in Early Modern England*. Oxford: Oxford UP, 2020.
- Olson, Rebecca. "Revising Jealousy in *The Merry Wives of Windsor*." *Medieval & Renaissance Drama in England*, 25 (2012): 174-190.
- Ostovich, Helen. "Bucking tradition in *The Merry Wives of Windsor*, 1602: Not a bad quarto, really." *The Merry Wives of Windsor: New Critical Essays*. Eds. Evelyn Gajowski and Phyllis Rackin. London and New York: Routledge, 2015. 96-106.
- Page, Frederick G. "Lime in the Early Bleaching Industry of Britain 1633-1828: Its Prohibition and Repeal." *Annals of Science* 60 (2003): 185-200.
- Parten, Anne. "Falstaff's Horns: Masculine Inadequacy and Feminine Mirth in *The Merry Wives of Windsor*." *Studies in Philology*, 82.2 (1985): 184-199.
- Pattison, Stephen. *Shame: Theory, Therapy, Theology*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Putnam, Linda L. and Charmaine E. Wilson. "Communicative Strategies in Organizational Conflicts: Reliability and Validity of a Measurement Scale." *Communication Year*

- Book 6* (1982): 629-652.
- Rawcliffe, Carole. “A Marginal Occupation? The Medieval Laundress and her Work.” *Gender & History* 21.1 (2009): 147-169.
- Rich, Jonathan. “A Two-Factor Measure of Jealous Responses.” *Psychological Reports* 68.3 (1991): 999-1007.
- Salovey, P. and J. Rodin. “Some Antecedents and Consequences of Social-comparison Jealousy.” *Journal of Personality and Social Psychology* 47 (1984): 780-792.
- Schoenbaum, Samuel. *Shakespeare: A Documentary Life*. Oxford: Clarendon Press, 1975.
- Scott, W.R. *The Constitution and Finance of English, Scottish and Irish Joint-Stock Companies to 1720*, 3 vols (Cambridge, 1910-12, repr. Gloucester, Massachusetts, 1968).
- Shakespeare, William. *The Merry Wives of Windsor*. Ed. Giorgio Melchiori. The Arden Shakespeare. Third Series. London: Thomas Nelson and Sons, 2000. (邦訳：ウィリアム・シェイクスピア『ウィンザーの陽気な女房たち』松岡和子訳、東京、筑摩書房、2001年。)
- Silva, Francisco Vaz da. “Sexual Horns: The Anatomy and Metaphysics of Cuckoldry in European Folklore.” *Comparative Studies in Society and History* 48.2 (2006): 396-418.
- Steadman, John M. “Falstaff as Actaeon: A Dramatic Emblem.” *Shakespeare Quarterly* 14.3 (1963): 231-244.
- St. Pierre, Ronald. “‘Who’s a Cuckold Now?’ : Cuckoldry in *The Merry Wives of Windsor*.” *Shoin Literary Review* 21 (1987): 103-122.
- The Acts of the Parliaments of Scotland*, vol. V (1625-41), (Edinburgh, 1870). In *General Index to the Acts of the Parliament, to which is prefixed a supplement to the Acts* (Edinburgh, 1875).
- The Acts of the Parliaments of Scotland*, vol. IX (1689-95), (Edinburgh, 1822). In *General Index to the Acts of the Parliament, to which is prefixed a supplement to the Acts* (Edinburgh, 1875).
- Wall, Wendy. “Why Does Puck Sweep?: Fairylore, Merry Wives, and Social Struggle.” *Shakespeare Quarterly* 52.1 (2001): 67-106.
- White, Gregory L. “A Model of Romantic Jealousy.” *Motivation and Emotion* 5.4 (1981): 295-310.
- White, Gregory L, and Paul E. Mullen. *Jealousy: Theory, Research, and Clinical Strategies*. New York: Guilford, 1989.
- Wisniak, Jaime. “Bleaching: From Antiquity to Chlorine.” *Indian Journal of Chemical Technology* 11 (2004): 876-887.
- Wolfthal, Diane. “Household Help: Early Modern Portraits of Female Servants.” *Early Modern Women* 8 (2013): 5-52.
- “buck.” *Oxford English Dictionary Online*. Oxford University Press. 2023. <https://www.oed.com/>

- “jealousy.” *Oxford English Dictionary Online*. Oxford University Press. 2023. <https://www.oed.com/>
- 石川実『嫉妬と羨望の社会学』京都、世界思想社、2009年。
- 岩崎宗治「シャリヴァリと鹿の角——『ウィンザーの陽気な女房たち』(2)」『英語青年』139(2)(1993年)、72-75。
- 「シャリヴァリと鹿の角——『ウィンザーの陽気な女房たち』(1)」『英語青年』139(1)(1993年)、14-16。
- 川崎直樹「大学生の質問・発言行動と恥への対処行動との関連」『人間福祉研究』11(2008年)、149-157。
- 神野雄「嫉妬研究の概観と展望」『神戸大学発達・臨床心理学研究』14(2015年)、18-28。
- トムソン、エドワード・P「ラフ・ミュージック」(福井憲彦訳)二宮宏之他編『魔女とシャリヴァリ』(叢書・歴史を拓く—『アナール』論文選〈新版〉1)東京、藤原書店、2010年。79-138。
- 中里浩明「恋愛の嫉妬の認知理論—嫉妬と羨望の心理学(6)—」『神戸女学院大学論集』40(2)(1993年)、25-35。
- 二宮健一「1. 洗浄と清潔の歴史外観」(講座「清潔な暮らしと洗浄」シリーズ)『繊維製品科学』37(6)(1996年)、292-299。
- 樋口匡貴『恥の発生—対処過程に関する社会心理学的研究』京都、北大路書房、2004年。
- 三井宏隆他『認知的不協和理論—知のメタモルフォーゼ—』東京、垣内出版、1996年。
- 和田実「恋愛関係嫉妬時の情動とコミュニケーション反応—嫉妬の強さおよび性との関連」『応用心理学研究』40(3)(2015年)、213-223。

Received : April, 23, 2024

Peer-reviewed : June, 5, 2024

Accepted : June, 5, 2024